

**絵馬に関する事前調べ** (参考文献 主文：岩井宏實『絵馬に願いを』二玄社、2007年。  
吹き出し内：渋谷申博『面白いほどよくわかる神事・仏事のしきたり』日本文芸社、2008年。)

## ① なぜ「馬」なのか？ 絵馬のルーツと歴史

日本人は古くから神霊は乗馬姿で人界に降臨するものと信じ、馬を神聖化していた。



現在祭りの神幸に神輿が用いられる以前は、神霊の依代（よりしろ）である鏡を取り付けた櫛を馬の背に立てて行っていた。馬は神座の移動に必須のものとされ、神事の際に馬を捧げることは当然であった。祈願の際にも神様が来てくれるようにという祈りをこめ、同じように生きた馬を献上していた。



奈良時代には祈雨や止雨の祈願のために吉野の丹生川上神社に馬が奉納されたことが知られている

やがて、生馬にかわって土馬・木馬を献上するようになる。さらには、馬の形を造ることができない者が馬の絵を献上するようになり、これが現在の絵馬のルーツである。奈良時代には絵馬の原型があったとされる。



生きた馬の代替品だった絵馬：馬は貴重品ですので、そう簡単に奉納できるものではない。そこで絵に描いた馬で代用したのが絵馬の始まり。古墳時代頃から奈良時代にかけては、土や石、木などでつくった馬の人形（土馬・馬形代）も用いられたが、その後廃れる。

### 平安時代

神仏習合思想が普及し、観音菩薩も乗馬姿でこの世に示現されたなどの説が広まり、著名な寺院にも絵馬が広く奉納される。この時代の絵馬は、今日の絵馬のように小型であり、馬の絵がほとんどで、個人ではなく共同体の共同祈願として奉納されたものであった。



### 室町時代

大絵馬も現れるが民間信仰的要素を強くもつ小絵馬が主流をなし、それも個人祈願、ことに現世利益を求めるものが多くなった。

## ② 絵馬の図柄について・絵馬の匿名性

小絵馬の意味や内容が多様化するの江戸時代文化・文政の頃。『願懸重宝記』という書物が市井の人々から評判となり、小絵馬奉納が広まる。そして機知に富んだユニークな図柄が生まれる。馬意外に、神仏像、祭具、祈願者の礼拝姿、祈願内容、干支などバラエティに富んでいる。

もともと小絵馬を奉納する風習は、民間信仰を基盤として伝承され慣習化されたものである。本来の絵馬は、願文も氏名も一切書かず、ただ「寅年の女」「辰歳男」と祈願者の干支と性別のみを記していた。

## ● 図柄の種類と意味合い

《幸せを願うもの》

- ・馬：諸願成就
- ・尉（じょう）と姥（うば）：長寿 いわゆる「高砂」の場面
- ・向天狗、天狗：魔除け
- ・七つ面、七面天女、毘沙門天：福授け  
福を授けてくれる特異な神、七面様（七面大明神）。毘沙門天は福を授けてくれる七福神の一人。
- ・不動尊、不動の剣：魔除け、火難除け
- ・男の拝み、女の拝み、子供の拝み、母子の拝み：秘め事祈願  
一般に「拝み絵馬」と呼ばれ、どんな神仏に、どんな場合でも奉納できる絵馬。公開を憚るような願いの際でも、神仏のみが祈願者の意  
図を察してくれるようにできた絵馬。図柄は老若男女さまざまである。
- ・鳥居：家内安全、諸願成就
- ・山笠：疫病退散、諸願成就  
絵馬には神霊の依代・祭場・祭礼をかくものがあるが、そのひとつが博多山笠図絵馬。

このほか、商売繁盛、子供の成長、子孫繁栄、断ち事、縁切によって図柄は多数。（岩井宏實『絵馬に願いを』（二玄社、2007年）を参照

## ③ 絵馬師

絵馬、とくに小絵馬はもともと祈願者自信がうちなる思いを具現化して描いていたという。やがて図柄のアイディアとパターンが定型化し、伝統的に共有される。すると祈願者にかわって絵心のある人が図柄を大量に描き、祈願者はそれを購入し奉納するようになり、絵馬専門の絵かきも出てくる。

## ④ 絵馬の形

絵馬の形状⇒屋根型と四角型

### 屋根型

屋根の部分に薄い板を合掌に貼り付け、垂木を出し、黒く塗ったものが最も丁寧である。が、普通は長方形の板の上辺を屋根型に切り墨を直接塗ったり、単に五角形の板を用いたり簡略されている。

### 四角型

板の周辺に額縁のように板を貼り付け、墨で黒く塗ったものももっとも手の込んだもの。枠に色を塗らないもの、上辺の二隅を切り落としたものなどもある。四角の大きさ、辺の長さは様々である。

形状を地方別にみると、関東は概して黒枠の縁が出ている屋根型が多く、薄い板が使われている。関西は屋根型が少なく、原版の四角型、とくに横長のものも多く見られる。